

フレーベルの人間教育の一考察

野 崎 信 洋

一 人間学の展開

フレーベルは、学識の高い、決断力の強いしかも熱心な宗教家を父とした家柄に誕生した。即ち一七八二年、独逸の世相は決して平和な時代ではなかった。それは政治的に、思想的に、或は社会的に一つの転換機に遭遇して、重要な時代になっていた。

ところが、彼は生後九ヶ月にして唯一の母を失い、やがて継母を迎えねばならなかった。従って、幼いながらいろいろな人間的苦勞を経験したのである。然し、このことは彼の生涯にとって寧ろ充実した精神的内容を形成する萌芽となって発展して行ったのであろう。十六歳の頃小学校に行ったが、勉強には無関心で、沈思冥想に耽っていたという。しかし、厳格な宗教的雰囲気の中、沈思冥想に耽っていたという。「第一神の国を見よ」という語を通じて、常に「神」という觀念をもった思想的生活を信条としての精神生活に終始したのであった。やがて彼は基督教的思想を根本とした偉大なる教育哲学の体系づけを成し遂げた

のである。ところが彼は成長するに従って建築家になるべく希望を抱いていたが、機会あってペスタロッチーの思想的核心に触れ、フレーベルにとっては、その生命の進路を決定し、深い使命の自覚を与えられ、愈々人間教育の重きを痛感し、教育を通して生命の革新をはかろうとした。特に、ペスタロッチーは学問的内容の中心としては、あらゆる認識を直観の基礎の上に立って、人生、教育を理解され、把握しようとしたのである。これを学び取ったフレーベルにとっては堪えられない歓喜であると同時に、彼の思想的内容は益々発展を加え、進むべき指針ともなったのであろう、或は又ペスタロッチーは観察により自己自身を作りあげたということを知った彼は深い慰めを得たのであった。又彼は同様に自然を観察し人生を観察し自己完成の道をたどろうとしたのは、彼が慰めの中から得た決心であった。彼の父親も常に言いきかせて、「汝の頭を用いよ。そのことを理解せよ」と言っていた。彼は自己の生命内容を自らの体験によって充実し、恩師とも言うべきペスタロッチーよりの精神的受胎によって確信を得、一層感激は

深まり、「人間の教育」を生み、「幼稚園」を生み出す源泉となったのであろう。或る時、兄と別れる時記念帳に認められた言葉の「人間の運命は目的に至る戦いである。愛する弟よ、男らしく確固たる不拔の行いをなし、君に逆う障害と戦い、そして必らずや目標に到達するものと安心しておれ」という言葉などを胸に収めて、高い目的と新たな自覚の下に学問を継続したのである。即ち、彼の心に深く根ざした人間教育の原理的なものをつかむことに研究を進めて行ったのである。

彼は、その著「人間の教育」の冒頭に「凡そ天地間の万物の中には、或は永久不滅な法則が存在して、これが万物を支配していることは、かかる信仰を以て見、またかかる思想を持っている人々には明白なことである。——万物を支配する法則こそは神である。神は万物の根源であって、万物は皆神より出で、神の支配を受けている。従って宇宙の万物の本質は皆この神性を受けている」という信仰思想と、神性思想より問題を打ち出さんとする世界的教育観の根本思想たる大命題を打ち出したのである。「教育とは、人を導いて清浄無垢の境に至らしめ、その内部の靈性を自発的に、自由に発現することを得しめ、その境地に至るべき方途を教える」ものである。或は、「教育とは神の心を知らしめることであり、その姿が具体化した時は教育の具現である」とも述べている。更に、「人間性の本質、児童の発達の自然の法則を究むることを怠っては教育の場を立つことは出来ない。それは飽くまでも人間自身のなしている行動について反省し、更に、真理を踏み行い、向上させることによって、人間教育の効果がえられる」も

のである。人間は本性のうちに呼吸している。その「本性は神という存在の認識論に立ってこれを考え、神との信仰の結びつきに従って人間の真実の叡知が生ずる」のである。信仰なくしては生きた人間の内容は混乱する。或は、「人間陶冶の必然的な態度」である。「信仰に生きる若い人の目は喜びで微笑んで」おる。人間は神の子であって、故に神性を賦与されておる。この神性の発展こそ人間の根本理念として深く思索したのである。

彼は「人間の教育」の随処に、「神性」とか、或は「神的」と言う文字が発見されるのである。彼の世界観はすべて神的統一に基礎をもっている。神的統一を外にしては、彼には自然も、人間もない。神と云う宗教的な思想と同じに哲学的な思想がその絶対的法則として宇宙に内在しているという神的な基礎論に立っている。或は、彼は、この宇宙を一大有機体となし、自然界のすべてに一貫した統一的な作用と心得ている。即ち一貫せる統一のもとに万物が生存して、万物に共通な神性が秘められているとも考えている。そしてしかもこの神性が万物の本性を形成していると説くのである。「自己の本質すなわち神性を十分に意識し、生き生きと認識し、明らかに洞察し、そして自己決定と自由とをもって自己の生活のなかにこれをあらわし、活動し、明瞭にさせる」と言うのである。或は又「凡てのものは神的なものが、そのなかに働いていることによってのみはじめて存在する。このそれぞれのものの本質である」と述べている。「神的なものによってのみすべてのものは制約されるのである。神的なものの中に、神の中に、神的

なものによって、神によって安らい、生き、そうして存続している」
とも表現している。すべてのものの使命および職分はそのものの本
質、従ってそのものなかにある神的なもの、ひいては神的なものそ
れ自体を發展させながら表現することである。このように、彼は、万
物は神的なもの即ち神から生れて来た、神の中に万物の唯一の基礎が
あるとして、神と人間との間に内的統一を自覚させること、即ち教育
の目的である。「人間の教育とは自覚に進み、思索し、理解する本質
としての人間を意識と自己決定とをもって内的理性、即ち神を純粹に
完全に実現するように進展する手段」である。或は、「人間と自然と
は共に神から出で神に依って規定され、神の中に存在するということ
を教育、教授、教訓に依って人々に明かに意識させ、そしてこれを実
生活に於て役立たせることは、教育全体の義務」であったのである。

思うに、この彼の深淵な思想を極めんとするならば、「人間教育」の
思想を一言半句を粗末にしてはならないが、実に、宗教家として、実
践的教育家として、或いは哲学者としての貴重な言葉のひらめきを感
じとらざるを得ない。その展開に於いて、緻密な表現において、周到
な方法において、教育的言辞が「人間教育」の到る処に見られるので
ある。「生命を全体として知ること、これが学であり、生命の学であ
る。そして意識的、思惟的、認識的な存在としての人間についての知
識が、人間自身における表現や実施に関係づけられたところの知識」
が人間の教育の教育学だと言うのである。「思惟し認識する存在とし
ての人間を自己の職分の自覚と、自己の使命の達成に導いてゆくため

の処方」が彼の教育論である。それ故に職分に忠実な純一無雑の神聖
な生命を表現することが、人間最高の目的であり、己自身を決定する
最高の行為と考えて、教育目的の実証を追求したのである。即ち彼は
哲学的理想を教育の實際に生かして、幼児、児童の一人一人の生活の
中に実現したところに彼の実践的教育学における偉大な生命学を展開
したのであるまいか。

二 宗教教育の展開

ペスタロッチーの生命に浸潤して行った「宗教的情操の培えは、母
の生命の中にひたる幼少期にその感化を受け、遂にペスタロッチーの
生涯の宗教的信仰の背景をなした」ものであったが、「フレールベル
は、前述のように、生来熱心な牧師を父として、そしてきびしい宗教
的生活習慣の家庭環境に育成せられたのである。従って、彼の教育に
対する宗教観は、実に濃厚な理想主義思想に包まれていたと思う。宗
教と人間教育のあらゆる分野において、その根を深く下ろして行っ
たのである。このような教育家は世界教育史上稀有であると評されてい
る。教育即ち宗教、これが彼の信条であり、彼の教育学の特色であ
り、無論、宗教的な思想が彼のその学説の隅々にまで浸透しているの
である。彼は児童神性論を説いた。即ち「教育の仕事は児童の本性的
この神性を発する外の何物でもない。と説き、然るに神性は無限の
ものであり、絶対である。故に、神性の啓発を目的とする人間の教育
は幼児、児童において、無限を無限ならしめ、絶対を絶対ならしめよ

うとする最も聖い企画」でなければならぬ。そして、「もろもろの作用や現われにおいて、一つの全体として、その前に現われている。

あの生き生きとした心情の一致や明瞭な精神の一致についてなのである。この一致や明瞭な精神の一致こそ真の宗教心のゆるぎない土台であり基礎」なのである。と決定づけて、飽くまでも生きた児童の具体的な生命に即した教育行の実践を計り、その内容の発展を促し、ここに神性の具体的発展を考えたのである。

今日、教育と宗教とは往々にして問題となる。学者間にも論議され、その内容の解釈には一層の困難な問題があるが、宗教教育と彼の人間教育に於いては、まさしく神性が万物を創造する精神であり、無限のものであって、人間の心に内在している神性の啓発作用が教育である、と言うのである。そしてこれを行う機会としては、「人生初期における教育は、後年の精神生活にとって、他のいずれの時期の教育より一層重要であると信じた」のである。或は無意識の理解は、意識の芽生えでもあれば、起始でもある」。として、後年の意識生活を基礎づけようとするところにも彼の神性発展論の展開を教育中心に考えたのではあるまいか。

教育の基礎を幼児、児童の上に実践して行ったことは、勿論その意義と価値が存在し、その手段方法においても容易性でもあろう。従って幼児の宗教教育の重要性は論を俟つまでもあるまいが、彼の徹底した宗教教育論に対しては学ぶべき多くのものを感じるのである。仏性の展開を説く。これはやがて仏を信じることであり、仏に近づくこと

となり、自己活動の中に仏を発見することともなる。更に自己を知る道ともなる。ここに宗教教育の必要性があるのだろう。彼は、神の導きと援助と祝福という最も確かな証拠のもとで、精神的なものを、肉体的なものの中に、且つ肉体的なものの上に、また神的なものを、人間的なものの中に、しかも人間的なものを通して表現することが、人間全体の共同の努力なのである。この努力をすることによって、人間の生活において、その行為や業において自己を表わすところの基督の祈りの生活となるものである。と説いておるのである。

また、神を信じ、神と人間とを愛し、更に進んで子どものように従順に神に仕えることによって基督の生活が再現される。ここに信仰と結ばれる宗教教育の内容に導入されるのであろう。そして基督の教訓や要請を自己自身の生活の中に適用し、それに従って生きることが可能になるであろう。「両親と子どもとの精神の一致に基づく将来の宗教教育のみが、豊かな実りをもたらし、祝福に恵まれるので、しかも内面的、精神的な生活に対する新鮮な感覚や澄みきった眼が、幸福な生活関係によって、この宗教教育は、実り豊かなもの、祝福に満ちたものになる」という宗教教育論なのである。

仏教の宗教教育論として説く、即ち、自我の確立とか、慈悲の生活化、菩提心とか、道心とか言う内容の教育化とは凡そその趣きを異にしているが、しかしフレイベルの宗教教育論においてもその一致点を多く見え出すのである。この問題に就いては後日研究を進めて見たいと思う。只現今の仏教に於ける宗教教育者は、何を考え、何と取り組

んで其の行為を繰り返しているのか。単純な形式的なものに重きをおいて、真に先祖の培った宗教観宇、宙觀をも十分身につけておられないことのように考えられる。一面的な他の宗教教育論を肯定して、自己活動の時点を忘却してはならない。フレーベルは、宗教教授の内容を理解させうる精神的思想の一貫性を具有していた。これがなければ宗教的人間の發展は覚束ないことになるであろう。彼は「初期の少年の感覚や心情がもっている宗教的な力を信じなすぎる。だから次に後期の少年の生命や心情がきわめて、空虚なものとして現われ、精神的で純粹に人間的な倫理的かつ宗教的な知覚に閑してあまりに無経験なものとして化石化して来る。これは特に宗教的真理を理解されないからであり、人間は自己の中において多くのことを体験するように、自己の心情の生活や宗教的生活の自己の精神的な發展過程の、もろもろの出来ごとや、条件を意味するようにしなければならぬ」として、しかも幼児、児童期に於ける宗教心の培いを強調し、人間が人間である故に宗教的感情の萌芽も精神的の中に成長して来るのである。若し「人間が宗教なしに、生活し得るようなものであったならば、宗教教育によって宗教を与えるというようなことは不可能でなければならぬ」と述べて人間の宗教心を認めて、或は、「宗教心を少しも顧みないで放っておくような無分別な親達があるならばよく考えて見る」べきことである。更に「人間の教育」の「宗教および宗教教育について」宗教を軽く定義して次のように述べている。「知覚されて独自の精神的な自己ないし人間の精神が、もともと神と一つのものであったという予

感を明確な意識に高めようとする努力、およびこの意識に基づいて神と合一しようとする努力、さらに、この神との合一の中で生活のそれぞれが宗教である」とする神的統一の精進力、忍辱の力は彼の信念的強さを示している。もともと宗教というものは、人間の本性のうちに在って、神とか靈性とか言うものは、永劫に自己を發展しつつ、決して分離するものではない。ところが人間は、宗教の本質を純粹に認め、これを明らかにすることは極めて稀である。宗教心は本来具有していてもこれを自覚し、認識することの困難な理由としては、「人間は精神的存在者であると同時に、肉体的存在者でもある。また肉体的存在者として空間のうちに生き、ものを空間的に考える傾きのあるものである。神との合一を保ちながら生きようとする努力や或は、もしこの統一が防げなければ、いち早く恢復しようとする努力を満足させる手段や方法を提供し、指示すること、これが宗教教育」である。宗教教育はたとえ形式を欠く漠然とした意識されていないものにせよ、本来具有して宗教心の培いに対して勇敢にその活動を展開せねばならないのである。これがフレーベルの宗教教育の本心だと思ふのである。

三、遊戯の展開

フレーベルは、「教育の真の妙味は幼児の教育にある」という言葉を述べている。長田新氏の「フレーベルに還れ」の緒言に、道元禪師の学道用心集の言葉を引用され、「発心正しからざれば万行空しく施

す」と述べ、華嚴經の「初發心時便成正覺」として、幼児教育に深い意味をもつと同事にこの業の困難さを暗示されている。「幼児が感覚器官、四肢活動が発達して肉体的なものを外部に自発的に表現し始めるようになる」と、人間発達の乳児の段階が終り、幼児の段階が始まる」。そもそも、母体から離れた赤坊が最初の行動を起したとき、既に人間として遅しい身体的機能の活動の出発であり人間成長の萌芽である。然しこの段階までは、人間としての内的なものは、まだ分節されない。漸く言葉が用いられるようになると自発活動が盛んになり、即ち分節化していろいろな行動表現になって来る。詰り自己を外部に知らせる運動となる。自分の欲しているものを外に現わしたのである。前にも述べたことであるが、ここに重要な問題点が存しているのである。即ち幼児のささやかな活動と言えども、それは絶えず知覚や感覚を一致する行動となり、発芽しつつある自己の能力を証明するものである。そしてそれに幼児の生命もしくは幼児として人間の生命の活動である。フレーベルの教育学の中心問題の一つは、「創造的な存在として児童の創造力を教化し、育成することであり、しかし、この創造力を幼い日から教化し育成することが、彼の教育学の特色」とされている。そこでかれは遊戯の理論を遊具の創作とに全力を注いだのであったが、「遊戯することないし遊戯は、幼児の発達、つまりこの時期の人間の発達の段階である」として遊戯を指導し、児童を楽しませながら同時にその力を発展させなければならぬと考えたのである。それは「遊戯とはすでにその言葉自身も示していることだが、内

なるものの自由な表現、即ち内なるものそのものの必要を要求に基づくところの内なるものの表現にほかならない」と表現し、自発表現の重要性を重ねて説くのである。詰り遊ぶこと、ないし遊戯は児童幼児期に於ける人間の発達の最高の段階であり、「この期の最も純粋な精神的なあらわれであり、人間生活全体の模範ともいうべきものである」。子供は遊ぶことの姿において成人が想像出来ぬ程時間を超えて、「力いっぱい自発的に、黙々と忍耐よく身体が疲れきるまで根気よく遊ぶことは必ず遅しい」と考えられるのである。その姿はまさしくよろこびであり、平和でもあり、美なるものの源泉でもある。このような神的な光景は「子どもの生命の最も美しい現われ」ではないかと思う。彼にとっては、遊戯は単なる遊びではなく、実に「高い意義と価値」とをもっているのである。だから母親としても、この遊戯を育み育てなければならぬ。それは将来の内的生活の芽生えを認めることであり、全生涯の出発の萌芽である。即ち人間の最も純粋な素質や内なる精神が発揮されている姿であって、この時期こそ将来の源泉となり原動力でもある。

フレーベルは教育理想の根本的な思想として生命統一を主唱したことも極めて著名な文字であるが、凡ての行為の基礎として神的の発展を促し、自発活動を期待することは彼の唯一の教育活動と考えていたのである。宇宙万物は神の理性により、而も合理的な基本的な形によって、幼児自身の能力とも活動し発展させようとして与え、これが即ち恩物であった。この恩物という教育的玩具こそ「フレーベルがみ出

した貴重な玩具である。恩物とは神からの恩賜物のことである。幼児は、既成の玩具は忽ち破壊してしまう。即ちこれは幼児、児童のもっている破壊衝動の行為に外ならない。「フレーベルの教育学の企てるところは、何よりも自然の存在を認識し、神を知らせることによって、神のように絶えず生産し創造せしめるところにあるのであろう。彼は恩物を与えることによって、その目的とするところは、まず自然を知らせ、神を予感させ、神のように、創造する創造力を覚醒させることであつた。フレーベルは「人間は、神のように生き、そして神のように創造する能力の萌芽は、そもそも出生のその時から幼児に与えられている。教育はこの萌芽を發展させればよい」と説いている。しかし、幼児の心に内在している純粹なる萌芽でも、これを正しく発芽させ、更に成長發展させるその教育的環境を与えなかつたならば、即ち理想的な遊具を与えなかつたならば、萌芽は順調に育たない。遊具を与えることによって神を知らせ、宇宙を知らせ、更に神のように創造する創造力を覚醒させることがその目的であつた。しかし、いかに優秀な遊具を与えたとして幼児の本性に深く根ざしたものでなくては意味がないのである。「遊戯乃至児童の内的な、精神的、自発的な自己作業を適当に刺激し保育することが問題となってくる。というのは児童の精神を自由にすることが問題になるのであつて、単に児童の身体や四肢の外的活動が問題になってくるのでは決してない。——若し精神的な働らきが児童のうちに始まるや否やこの精神的なものを外的な眼に見ることの出来る形あるものに表現しようと、ここに自己を表わす

ところの外的な身体的な表現の術が現われて来る」として児童保育の唯一の目的は、人間におけるこの内面世界を發展させることであつた。だからフレーベルの遊戯とか作業はどこまでも内面的なものであり、更に精神的なものとして、その価値を意義づけているのである。この教育玩具としての恩物の特徴はやはり「森羅万象の性質や、一切の基本形式を含んでいる」或は「その対象物を種々さまざまの側から考察したり、さまざまな方法で取り扱ったり、児童の發達段階に即した一切のものを作り出したりするのである。即ち有機的な組み合わせを行いながら遊戯の中に夢と知的増進のフレーベルの考察した玩具である。これが、今日教育の現場にそれほど用いられておらぬのは何故だろうか。その扱いがあまりにも難解だからだろうか。結局、恩物の出し入れから始め、学問的で、特に幾何学的で、内面的であるものだからでもあろう。然し、これは考案者フレーベルも重ねて言うておるように人間教育の原理に基づいて、幼児期に於ける頭脳形成のはたらきに資し、其の他の遊びを楽しみながら、神を知り、更に自己を知る。即ち神の如く創造する創造力を覚醒さす遊具である。従つて、両親も教育者も、幼児期の行動や、幼児自ら活動している構成衝動や破壊衝動の実態を理解しながらその活動に当らねばならない。

四、結

フレーベルの研究は、勿論、一朝にして到底学びとれるものではない。彼は常に人間を追求し、教育とは何ぞやと、即ち教育の根本は自

発活動の萌芽を發展し自己を知らしめることにある。「神の如くに到達する創造的な創造力を覚醒することである。」そして、深く内面を掘り下げたのである。私は、今フレーベルの人間教育の一端を考察したに過ぎないが、今後一層フレーベルの幼児教育に対する哲学的思想を追求し、更に、教育学の真隨に触れ、将来の幼児教育の問題に対する重要な教育活動の資にいたしたいと考えるのである。

参 考 書

- 1 人間の教育 上下 岩波書店
- 2 世界教育聖典(フレーベルの人の教育) 玉川大学
- 3 フレーベル教育学 庄司雅子
- 4 フレーベル 庄司雅子
- 5 ペスタロッチーの道徳・宗教教育の研究 坂本藤太郎
- 6 ペスタロッチーの生涯 玖村敏雄
- 7 ペスタロッチー 福島政雄
- 8 教育と人間 森 昭
- 9 近世教育史 小西重行
- 10 フレーベルに還れ 長田 新